

〔日本書紀七景行〕十八年七月甲午、到筑紫後國御木居於高田行宮時有檼樹長九百七十丈焉百寮踏其樹往來時人歌曰、阿佐志毛能瀨概能佐烏麼志麿幣莞耆彌伊和哆羅秀暮彌開能佐烏麼志爰天皇問之曰、是何樹也。有一老夫曰、是樹者歷木也。嘗未僵之先、當朝日暉則隱杵島山當夕日暉覆阿蘇山也。天皇曰、是樹者神木故是國宜號御木國。

〔古事記傳仲哀〕於是息長帶日賣命於倭還上之時、因疑人心、一具喪船御子載其喪船先令言漏之、御子卽崩。如此幸之時、香坂王忍熊王聞而思將待取進出於斗賀野爲宇氣比獨也。爾香坂王騰坐歷木而是大怒猪出掘其歷木。卽昨食其香坂王其弟忍熊王不畏其態興軍待向之時、赴喪船將攻空船爾自其喪船下軍相戰。

〔古事記傳三十一〕歷木は書紀景行卷に到筑紫後國御木居於高田行宮時有檼木長九百七十丈焉云々天皇問之曰、是何樹也。有一老夫曰、是樹歷木也云々天皇曰、是樹者神木故是國宜號御木國とありて、公望私記曰、按筑後國風土記曰、三毛郡云々昔者棟木一株生於郡家南其高九百七十丈云々櫟木與棟木名稱各異故記之。〔棟字は櫟な寫誤れるか仁德卷に當荒陵松林之南邊忽生兩歷木挾路而末合、これら久奴木と訓り或人景行天皇此木に依て其地を御木國と名けられかくと和名抄には本草云、釣木一名鳥樟和名久沼木、また本草云、舉樹和名久沼木、日本紀私記云、歷木樟と舉樹と共に久沼木と記しながら別に出せば誤か、字鏡には櫻櫟同久沼木とあり古書どもに歷木と書るは櫻の意にて例の偏を省けるなるべし。〔漢ぶみにも櫻を通はして歷と作ることあり、又櫻と櫟と通はし書る例もありされど同物にはさて久奴岐は今も久奴岐とも久能岐とも云木なり、契沖くねきは今もこのきと云てつ非ず、さて久奴岐は今も久奴岐とも久能岐とも云木なり、るばみのなる木なりと云り、櫟を久奴木の實なり、久奴木の實には非ず、伊知比を櫟と書り、此字に依て混ふべからず、伊されど此記書紀の歷木は久奴木に當て書りや非ずや決め難き故あり、玉垣宮段なる葉廣熊白樟の下、名に依ては定めがたし、されば此歷木も櫻とは聞ゆれど其は何樹にあてたりや慥なれば、漢